

アイルランド

歴史遺産

フード&ドリンク

文化

アウトドア

ロケ地巡礼



アイルランド でああなたの心をいっぱい 

フック岬
ウェックスフォード県

史跡・歴史的 建造物

古城で繰り広げられる
ドラマとロマンス

フード&ドリンク

美食家をうならせる

アイルランド の文化

都会の喧騒から離れ、
心温まる歓迎に包まれる

雄大な自然

アイルランドの
トレイルを歩く

映画の中に見る アイルランド

『ゲーム・オブ・スローンズ』の
世界を北アイルランドで発見

アイルランド[®]であなたの心をいっぱいにする



アイルランドへ ようこそ

現代社会に生きていくと、「本物の体験」への憧れが生まれてきます。そんな時こそ、アイルランドへ出かけましょう。アイルランドの旅は単なる観光地巡りではありません。それはあなたの心に刻まれる旅路なのです……

たとえば、ワイルド・アトランティック・ウェイをたどり、ドニゴール県のスリーヴ・リーグの断崖の上に立つスリル。メイヨー県ウェストポートのマット・モロイズ(Matt Molloy's)や、アントリム県バリーキャッスルのハウス・オブ・マクドネル(House of McDonnell)などのアイリッシュパブで聴く伝統音楽セッションの高揚感。

また、それはファーマナ県アーン湖の島々に点在する古代の石像の冷たい感触かもしれません。さらには、タイタニック号が建造された街、ベルファストにある造船の遺産や、米HBOのテレビドラマ・シリーズ『ゲーム・オブ・スローンズ(Game of Thrones[®])』の世界を生み出したロケ地、映画『スター・ウォーズ』でジェダイの騎士の隠れ家となった島からの眺め……。そして何よりも、「ケード・ミラ・フォルチャ(Céad Mile Fáilte—アイルランド語で「10万回のようこそ」の意)」という言葉に象徴されるように、アイルランドの人々は温かいおもてなしで訪れる人の心を包みます。

「常に自分の心の声に耳を傾けなさい」とよく言われます。それならば、ぜひアイルランドへ。素敵な体験であなたの心をいっぱいにします。♥

Ireland.com

目次

- 4 | **史跡・歴史的建造物**
いにしえの旅へ踏み出す
- 8 | **フード&ドリンク**
アイルランドの味覚に浸る
- 12 | **アイルランドの文化**
文化をめぐる冒険：フェスティバル、文学、3つの都市を訪ねる
- 16 | **雄大な自然**
大自然に飛び込んで極上のアウトドア体験を楽しむ
- 20 | **映画の中に見るアイルランド**
アイルランドが映画・TVの人気ロケ地である理由を知る
- 24 | **宿泊施設**
B&B、古城ホテル、キャンプ、環境に配慮した宿泊施設
- 26 | **アイルランド・インフォメーション**
旅の計画に必要な情報

史跡・歴史的建造物

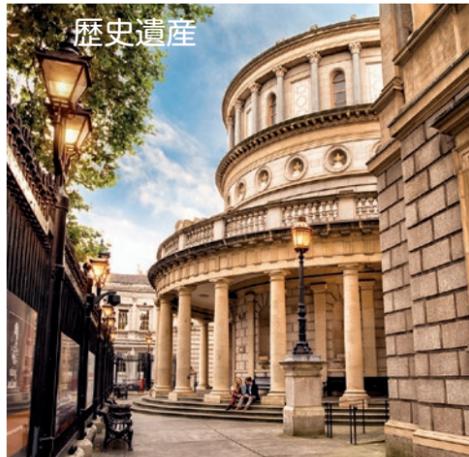


アイルランドが誇る史跡の価値は、目に見える建造物だけにあるわけではありません。たとえば、ウェックスフォード県のフック岬灯台で800年前の石段を登る。ミーズ県ロックフルーで17世紀の風景を今も残す庭園を散策する。あるいは、ファーマナ県アーン湖のデヴェニッシュ島で、900年近く前に修道士が建てたラウンドタワー(円塔)を見上げる。そうして、壁や塀に刻み込まれた歴史を感じてみてはいかがでしょうか。

優れた物語ほどイマジネーションを強く刺激するものではありません。そしてアイルランド島では、至るところでそんな物語が見つかります。街や村で、あるいは丘の中腹や断崖絶壁の縁で——特に「いにしへの東部」と呼ばれる地域で——目にするのできる胸壁、要塞、そして歴史ある邸宅に、豪華絢爛たるパーティや、魅惑的な人物、さらには幽霊まで登場するさまざまな物語が息づいています。不気味な雰囲気漂う16世紀のリープ城(オフアリー県)に至っては、「世界で最も呪われた場所」と言われるほどです。キャリックファークス城(アントリム県)はノルマン人が築いた要塞で、その800年の歴史の間にスコット人、アイルランド人、イングランド人、フランス人による包囲攻撃を受けました。また、豪華なカントリーハウスがいかに上品そうに見えるからといって、謀略に満ちた物語と無関係であるとは限りません。メイヨー県のウェストポート・ハウスがその良い例です。今日、この大邸宅は貴族的なエレガンスの象徴であるかもしれませんが、その地下には、悪名高い海賊女王グレース・オマリーが16世紀に所有していた城の遺構が残っているのです。

アイルランドにおける初期キリスト教の歴史もまた、人を惹きつけてやまない物語と美しい舞台背景に彩られています。6世紀半ばまでその歴史を遡るクロンマクノイズ修道院跡は、牧歌的な風景が広がるシャノン川の河畔に聖キアランが設立した修道院の跡です。この周辺を散策すると、「聖人と学者」の時代へとタイムスリップした気分になるでしょう。ケリー県のスレー岬にあるガララス礼拝堂では、数百年前に修道士たちをこの地に惹きつけたものを今も体感することができます。海岸沿いの「スリー・シスターズ」と呼ばれる3つの丘陵の頂とスマーウィック港の広大な入り江の光景には、誰も心を動かされるでしょう。そして、セント・パトリック・トレイルに沿って、アーマー県とダウン県にある聖パトリック(アイルランドの守護聖人)ゆかりの遺跡をたどっていけば、数多くの美しい景色に出会えます。特に、ソール教会の静寂の美しさは際立っています。

アイルランドでいにしへの旅へ出かけるのであれば、都市部を外すわけにはいきません。ダブリンやウォーターフォードでヴァイキングの歴史を、ベルファストではタイタニック号が建造された時代を追体験してみよう。どの街でも、人を惹きつける歴史の一端に触れることができます。400年前に造られたデリー／ロンドンデリーの城壁沿いを歩けば、17世紀にそこで大砲が轟音を立てていた様子が目に浮かぶでしょう。キルケニー県では、その名のとおり「中世の1マイル」を意味するトレイル、メディーヴァル・マイル(Medieval Mile)に沿って散策すれば、まるで中世へとタイムスリップしたような気持ちになれます。リムリックでは、13世紀までその歴史を遡るジョン王の城でノルマン人兵士の生活に思いを馳せることもできます。このように、アイルランド島では、今までにない形で歴史を体験することができるのです。♥



歴史遺産



2



3



4



5



6



写真: GABRIEL MCCORMACK

夢の城

アイルランドに残る数々の城は、静かな湖畔から切り立った崖の上まで、この島の最も美しい場所を背景に建てられています。ここでは、その中でも特に訪れる者を魅了してやまない3つの古城をご紹介します。

ダンガイア城
ゴールウェイ県

物語に足を踏み入れる

博物館、美術館、そしてさまざまな観光スポットで、移民たちの夢や希望からケルト人の創造性まで、いにしへの生き生きとした歴史に思いを馳せることができます。

1 アイルランド国立博物館 — 考古学館(ダブリン)

国立博物館の目玉は、アイルランドの青銅器時代まで歴史を遡る宝飾品群です。紀元前2200~500年の間に制作された精巧な宝飾品の数々は、欧州で最も重要な先史時代金細工コレクションの1つです。また、驚くほど保存状態の良い鉄器時代の湿地遺体(bog bodies)、ヴァイキング時代のアイルランドに関する展示、そして美しい装飾が施された8世紀のアーダーの聖杯(Ardagh Chalice)も見ることができます。

2 タイタニック・ベルファスト(ベルファスト)

この巨大な博物館は、「夢の超豪華客船」が建造された造船台の上に建っています。内部には、9つの展示室があり、実物の遺留品、船内の再現展示、そしてインタラクティブな展示を通して、タイタニック号とそれを建造した活気溢れる街の歴史にたっぷり浸ることができます。

3 ウォーターフォード・トレジャーズ(ウォーターフォード)

アイルランド最古の都市として知られるウォーターフォード。その歴史を紐解くには「ウォーターフォード・トレジャーズ」と呼ばれる3つの博

物館に行きましょう。中世博物館、ビショップ・パレス、そしてレジナルドの塔(写真)は、1100年前のヴァイキングによる街の建設から18世紀の豪華なジョージ王朝の時代まで、この街の歩みを物語ってくれます。

4 **デリーグラッド・フォーク&ヘリテージ・ミュージアム**(ロスコモン県)
アイルランドの歴史は、ドラマチックな大事件の数々だけでなく、人々の日常生活を紡いだ物語でもあります。この家族経営の小さな博物館では、ひと昔前の時代を生きた人々の暮らしぶりを示す、懐かしい品々が展示されています。馬に引かせる農耕器具や、かつての学校生活をしのばせる展示、1930年代にあらゆる田舎町の中心にあったバーや食品雑貨店を復元した建物などを見学してみましょう。

5 **アルスター・アメリカン・フォーク・パーク**(ティロン県)
「新大陸」への移民は、アイルランドの歴史における大きな出来事です。この広大な野外博物館では、当時のアイルランドとアメリカ両方の民家の様子を見ることができます。展示されている建物は、元の場所から移築またはオリジナルが復元されたものであり、移民たちが何を後に残して行き、どのような生活を新たに作り出したかの両方を知ることができます。当時の衣装を身にまとった案内役が、移民たちの物語を伝え、過去への架け橋となります。

6 **パワーズコート・エステート**(ウィックローウ県)
17世紀と18世紀は、裕福で虚栄心に満ちた貴族階級が、巨大な邸宅と広大な領地によって権勢を世に示そうと試みた時代です。その様子を今に伝えるのがパワーズコート。グレート・シュガーローフの山を見晴らす丘の上にあり、47エーカー以上に及び広さを誇る美しい庭園が見る者を魅了します。ここでエレガンスの時代を体験してみましょう! ♡

アイルランドを周遊していると、さまざまな古城が旅行者の目を奪い、足を止めずにはいられないことに気づくでしょう。草地に囲まれた湖を見渡す12世紀に遡る石積みの城跡、緑に輝く野原に建てられた優雅なお屋敷、荒波打ちつける息をのむような断崖絶壁に臨む廃墟……いずれも訪れる人に驚きと喜びをもたらします。それでは、まずダンガイア城へ向けて出発しましょう。ゴールウェイ湾の南岸に位置するこの16世紀の古城は、7世紀の要塞の敷地に建っています。城郭としてはかなり控えめな印象ですが、その歴史は、アイルランドのクラン(氏族)、イングランド女王エリザベス1世、20世紀初頭のケルト復興運動、そして、スキャンダルから法改正の引き金となった離婚事件などさまざまなエピソードに彩られています。北にゴールウェイ湾の海面を、南にクレア県バレン高原の岩に覆われた荒れ地を望むダンガイア城は、アイルランド島で最も風光明媚な景勝地の1つです。西部で最も多く写真が撮られている城であるのも不思議ではありません。

もし、森や草原、川に恵まれ穏やかな田園地帯に建つ城がお好みなら、カーロウ県のハンティントン城に向かいましょう。これは1625年、おそらく修道院であったところに、軍隊の駐屯地として建設された建物ですが、その修道院はさらに古代まで遡ると聖堂だったものです。ですので、この地がドルイド僧の亡霊や泣き女などの登場する伝説に満ちていることも意外ではありません。17世紀以来ここに居住している一族の末裔で、現在の城主であるアレクサンダー・ダーディン=ロバートソン氏と一緒に城を巡るツアーに参加してみましょう。一族の肖像画の背後に秘められた物語に始まり、エジプトの女神イシスに捧げられた地下の聖堂まで、驚

「ダンガイア城は、アイルランド島で最も風光明媚な景勝地の1つです。西部で最も多く写真が撮られている城であるのも不思議ではありません」

きの連続です。庭園もまた見逃せません。1680年代に整備されたこの庭園は、芝地、池、美しい林地が見事に配置されています。

ハンティントン城と対照的に、荒涼とした地に建つのがアントリム県のダンルース城です。ひたすら北を目指し、起伏の激しいコースウェイ・コーストを進むと、荒波打ちつける岩礁の上に佇むダンルース城の姿が現れます。足元に気をつけながら細い橋を渡った先に建つこの城は、人が住むには辺鄙で危険な場所のように思えます。実際、スペインからやって来た無敵艦隊の船が岩礁で難破しているほか、かつて1組のカップルがこの城のふもとで最後を迎えたという悲恋の物語も残されています。それでもこの地の魅力が変わりはありません。アルスター伯がここに最初の城を建てたのは13世紀ですが、元は古いヴァイキングの要塞であり、16世紀半ばには競い合う氏族間でこの城をめぐる争奪戦が生じていました。伝説によれば、この城はバンシー(泣き叫ぶ女妖精)さえ招き寄せたと言われています。この城がなぜこれほどまで人を惹きつけるのか、その理由は訪ねてみれば分かるでしょう。どこまでも広がるアントリムの断崖では気持ちが高揚し、素晴らしい眺めを見て新鮮な気分になるからです。♡

美味しいフード&ドリンク



心

地よい風が吹き抜ける海岸のパブで火にあたりながら堪能するシーフード・チャウダー。18世紀のマーケットを思わせる雰囲気の中で味わう伝統のアイリッシュ・シチュー。霧立ち込める湖を眺めながら楽しむアフタヌーンティー。アイルランドの食べ物は、単に味を楽しむものではありません。それは、土地と結びつき、記憶に残る体験となり、陸と海につながり、またそれを創り出した人々と分かちがたく結ばれたものなのです。

デリー/ロンドンデリーのブラウンズ(Browns)レストランで味わう、地元で生産された旬の食材を使った逸品。ゴールウェイ県のキラリー・フィヨルド、ミスアンダーストゥッド・ヘロン(Misunderstood Heron)フードトラックで味わう、ポウルいっぱいキラリー湾産ムール貝。アイルランドは、一度味わうと忘れられない味覚の宝庫です。

アイルランド島の食の神髄を知るには、まずはファーマーズ・マーケットに行くのが一番。職人の手作りチーズ、地産のシャルキュトリ(豚肉を主体とした食肉加工品)、ブナでスモークしたアイリッシュ・サーモン、ソーダブレッド、マウンテン・ラムなどが所狭しと並び賑やかな屋台を目にすれば、その土地の食べ物の豊富さと多彩さがよく分かるでしょう。ファーマーズ・マーケットはアイルランド各地で週末を中心に開催されており、たとえば、コーク県のミドルトン・ファーマーズ・マーケット、キルケニー県のキルケニー・ファーマーズ・マーケット、そしてデリー/ロンドンデリーのウォールド・シティ・マーケットなどがその代表例です。

コーク市民にとって特別な存在なのがイングリッシュ・マーケットです。1788年に始まったこのマーケットは、ブナでスモークしたアイリッシュ・サーモンのような伝統的特産品や、焼き立てのパン、新鮮な魚、チーズ、そしてコーク市民の好物であるスパイスビーフなどを買うのに最高の場所です。一方、ベルファストの食通はセント・ジョージズ・マーケット(金～日)の歴史ある雰囲気がお気に入り。こちらは19世紀建造の建物内で開かれており、野生の鹿肉からファッジまで何でも揃っています。

マーケット以外にも、パブ、レストラン、カフェなど、さまざまな場所で伝統的なアイルランド料理を堪能できます。数世紀にわたって受け継がれる伝統の味をじっくり味わうなら、スライゴのグローサリー・パブ(食料雑貨店を兼営するパブ)ハーガドンズ(Hargadons)のアイリッシュ・シチューや、ベルファストのマギー・メイズ(Maggie Mays)のアルスター・フライはいかがでしょう。また、ボックスティ(ポテトのパンケーキ)、コドル、ウォーターフォード・ブラー(粉をまぶした柔らかい丸パン)といった各地の名物メニューにもご注目ください。先に挙げた野生の鹿肉のほか、メイヨー県のアキル島、ゴールウェイ県のコネマラ、ウォーターフォード県のコメラ山を主な産地とするマウンテン・ラムや、ストラングフォード湖のムール貝もお忘れなく。

アイルランド各地を旅すると、フード・フェスティバルから繁華街にひしめくレストランまで、食の楽しみは尽きません。訪れるのが秋なら、3カ月にわたって開催されるフードイベント・シリーズ「テイスト・ジ・アイルランド(Taste the Island)」で、お腹いっぱいになれるでしょう。フード・トレイル(テーマのある飲食の体験を楽しむ旅)や、フード・フェスティバル、料理教室、さらには採食生活のミニ体験まで、さまざまな楽しみ方でアイルランドの「食」を体感してみてください。それは各地に根付く文化を体験する最高の方法です!♥

フードツアーの魅力

フードツアーは、アイルランド島内各地の食文化と伝統料理を体験する理想的な方法です。

アイルランドでは今、「食の革命」が進行しています。農業や漁業の従事者、食品生産者、そしてシェフたちが、この緑の島が誇る世界有数の純粋かつ豊かな食文化の価値を認識し始めたからです。そうした中で、フードツアーは、地元の人々と旅行者が共に各地域が誇る最高の味を堪能する機会として、人気が急上昇しています。

ベルファストで飲食を主目的としたウォーキング・ツアーを主催しているテイスト&ツアーNI(Taste & Tour NI)のキャロライン・ウィルソン氏はこう説明します。「お客様は必ず、旅の最初にこのツアーに参加していればよかったという感想を残していけます。皆さん、店先に並ぶ食品の多彩さに驚かれ、そして、他の旅行者とだけでなく地元の人たちとも触れ合えることを楽しんでいらっしゃいます」

各ツアーは、それぞれ独自の個性も売り物にしています。ベルファストから1時間半ほどの距離にあるエニスケレンの「エニスケレン・テイスト・エクスペリエンス(Enniskillen Taste Experience)」は、この歴史ある街における「食」のさまざまな側面に光を当てており、職人によるサワー種の手作りパンや地元産のアイスクリームから、ファーマナ県随一の高級レストランである28ダーリング・ストリート(28 Darling Street)のコンテンポラリー料理まで楽しむことができます。

グルメの街、コークの魅力より深く知るには、「ファブ・フード・トレイルズ(Fab Food Trails)」に参加してみましょう。博識なガイドたちが、歴史あるイングリッシュ・マーケットに関する裏話を語ってくれます。そこで売ら

れているトライプ(食用とされる反芻動物の胃袋)等の食品が、地域の歴史の一端を伝えていることが分かるでしょう。ゴールウェイでは、ゴールウェイ・フードツアーズ主催の「アラウンド・ザ・マーケットプレイス(Around the Marketplace)」ツアーが開催されています。まず、この街が誇るファーマーズ・マーケットに並ぶアトランティック・オイスターとアイルリッシュ・ファームハウス・チーズから始まり、続いて、生産者と交流しながら、受賞歴のあるレストランやカフェで食事を楽しみます。また、デリー/ロンドンデリーの「メイド・イン・デリー・フード・ツアー(Made in Derry Food Tour)」は、ストリートフードと地産チーズの試食を4時間の散策に盛り込んでおり、25を超える地元産のフードとドリンクをこの城郭都市の歴史ある雰囲気の中で味わうことができます。土地の魅力をより深く理解するのにうってつけの方法です。

別の方法として、アイルランドの肥沃な田園を本格的に探索するツアーもあります。ウェックスフォードのフードツーリズム・プロジェクト、テイスト・ウェックスフォード(Taste Wexford)が企画した「フラワー・フェザーズ・アンド・フルーツ(Flour, Feathers and Fruit)」ツアーは、伝統的な石挽の製粉所、イチゴ農場、そして有機飼料を使用する養豚場と養鶏場を訪問する半日のツアーです。また、オファリー県の中心部でワイルド・フード・メアリー(Wild Food Mary)が実施している採食ツアーは、季節に応じて、ヘッジロウ・ハーブ、フルーツ、花、そして秋に実るベリーやシャントレル(食用キノコ)などを収穫できます。

このようにさまざまなツアーがありますが、それらすべてに共通点があります。それは、地元の人々と交流して思い出に残る時間を過ごす機会であること、また地元の人々と一緒に古くから伝わる食の遺産を再発見し、それをアイルランド島の個性の1つとして位置づけることです。♥

「皆さん、店先に並ぶ食品の多彩さに驚かれ、そして、他の旅行者とだけでなく地元の人たちとも触れ合えることを楽しんでいらっしゃいます」

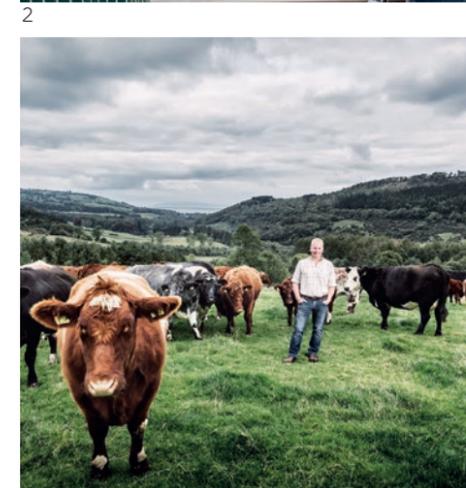
採食体験
リートリム県



ワイルド・アトランティック・ウェイの味覚



3



4

- 1 パイク・ン・ポムズ(Pyke 'N' Pomes) — デリー/ロンドンデリー
- 2 チーズ専門店:シェリダンス・チーズモンガーズ(Sheridans Cheesemongers) — ゴールウェイ
- 3 ハリーズ・シャック(Harry's Shack) — ロンドンデリー県
- 4 グレンアーム産の短角牛 — アントリム県

アイルランドの天然食材の味わい

豊かな味わい、熱意ある生産者、そして何世代も受け継がれてきた伝統。今こそ、アイルランドの真の味覚を楽しむ絶好の機会です。

豊かな海と肥沃な畑地に恵まれたアイルランドの農林水産物は、お皿の上で極上の料理へと姿を変えます。まずは、ビーフについて見てみましょう。緑豊かな牧草地と小規模な農場経営のおかげで、アイルランド島では、グラスフェッドビーフ(牧草飼育牛)が標準となっています。実際に味わってみたいなら、デリー/ロンドンデリーのフードトラック、パイク・ン・ポムズ(Pyke 'N' Pomes)のワギュービーフバーガー、あるいはダウンスケルキンチーのレストラン&パブ、バルルー・ハウス(Balloo House)でハナン・ミーツ(Hannan Meats)から仕入れたグレンアーム産短角牛サーロインのヒマラヤ岩塩エイジングビーフをお試しください。

ラムは、アイルランドで最も有名な料理の1つであるアイルリッシュ・シチューを作るときの基本食材です。ラム、ジャガイモ、玉ねぎ、人参をオープンで煮込んだこのキャセロールは、シンプルでありながら、時代を超えた人気料理であり、焚火で調理するという料理の伝統を受け継いでいます。

1970年代後半に生産が始まって以来、アイルランドの農家によって手作りで生産されるファームハウス・チーズは、欧州で最も注目を集める食体験の1つへと発展しました。生乳ブルーチーズであるヤング・バック(Young

Buck)のようなパンチの効いた新しいスタイルもあれば、デュラス(Durrus)、キリーン(Kileen)、セント・トーラ(St.Tola)などの定評ある人気銘柄もあります。ティベラリー県のキャセル・ファームハウス・チーズ(Cashel Farmhouse Cheese)のようなチーズ生産者を訪ねることは、チーズ作りのプロセスをより詳しく知るのに良い機会であり、ファーマーズ・マーケットは、地元の生産者と知り合い、職人による手作りの味を堪能する理想的な場所です。

海の幸の味覚を一通り体験できるのが、ワイルド・アトランティック・ウェイに沿って、スモークハウス(薫製場)、水産食品生産者、牡蠣養殖場などを巡る「テイスト・ジ・アトランティック(Taste the Atlantic)」トレイルです。アトランティック・サーモンの燻製、牡蠣、ムール貝やカニを味わうなら、海岸線沿いに点在するレストランが狙い目です。

海の恵みを味わうことができる場所は、高級レストランや伝統的なパブではありません。ロンドンデリー県ポートスチュワート・ストランドのシーフードレストラン、ハリーズ・シャック(Harry's Shack)では陸揚げされたばかりの新鮮な魚を使った料理を楽しめます。あるいは、ドニゴール県キリーベグスの漁港を見晴らすレストラン、キリーベグス・シーフード・シャック(Killybegs Seafood Shack)で、アイルランドのベスト・チャウダー賞を受賞したチャウダーを味わうのもおすすめです。一風変わったものを食べてみたいなら、たとえば、アントリム県の海岸で採れるダルスやカラギン・モスなどの海藻を試してみてください。

新世代のシェフたちは、アイルランド島が誇る極めて豊かな自然の恵みを飽くことなく探し、積極的に産地へ足を運ぶことで見聞を広めています。こういったシェフたちのおかげで、今や、かつてないほど気軽にアイルランドの素晴らしい味覚を楽しむことができるようになりました。♥



Taste & Tourのひとこま
ベルファスト

アイルランドの文化

アイルランドの文化・風土が内包している「アイルランドらしさ」は、手に取ってそのままお持ち帰りできるようなものではありません。実際にその場所で体験しないと感ぜることができないのです。だからこそ、物語、風景、歌、そして独特の雰囲気にもまた触れたくなくて、何度でもこの地に戻ってくる人が絶えないのです。

1,865マイル(3,000キロ)を超える海岸線に囲まれた島国アイルランドでは、当然のごとく、海がその文化に大きな影響をもたらしています。特に海岸沿いに点在する町や村ではその影響が顕著です。アイルランド西部特有のボート「カラック(カラハ)(currach)」から、岩だらけの岬に立つ灯台まで、こうした地域の生活様式は海に支配されています。また、海岸沿いの地域社会は、アイルランド語の存続において計り知れないほど大きな役割を果たしています。「ゲールタクト(ゲールタハト)」と呼ばれる地域では、多くの人々がアイルランド語を母語として日常的に話しています。メイヨー県のアキル島やケリー県のディングル半島西部を訪ねれば、地元の人々が実際に話すアイルランド語を耳にすることができるでしょう。アントリム県の北部やアーズ半島周辺では、アルスター・スコットランド語(Ullans)の話者について同じことが言えます。彼らには活気に満ちた伝統音楽とダンスの伝統があり、それがこの言語文化を存続させる力となっています。

アイルランドは小さい島であるにもかかわらず、文学界に多大なる貢献を果たしています。劇作家や詩人、作詞家から物語作家まで、アイルランドが誇る文学史上の功績は、4人のノーベル賞受賞者(ジョージ・バーナード・ショー、W.B. イェイツ、サミュエル・ベケット、シェイマス・ヒーニー)に代表されるのみならず、現在も、ピューリッツァー賞を受賞した詩人ポール・マルドゥーンや、イマー・マクブライド、エマ・ドナヒュー、コルム・トビーン、アンナ・バーンズをはじめとする、さまざまな賞を獲得した小説家によって発展し続けています。これらの作家たちは、アイルランド島全体に共通するストーリーテリングの伝統を受け継いでいます。かつては民間伝承、武勇伝、神話の形態を取っていたものであり、「シャナキー(seanchai)」と呼ばれる語り部によって受け継がれてきました。いにしえから続くこの技芸は、現在、コーク県の「ケープクリア島ストーリーテリング・フェスティバル」(9月)で披露されているほか、ケリー県の「リストーウェル作家週間」(5月)、ダブリン県の「ドーキー・ブックフェスティバル」(6月)、ダウングの「ヒルズバラ文学・創作フェスティバル」(4月)といった人気の文学イベントでも体験することができます。そして、ユネスコの「文学都市」に認定されているダブリンでは、2019年にオープンしたばかりのアイルランド文学博物館にて、マルチメディア展示や貴重な収蔵品を通して伝統の全貌を知ることができます。

かつて多くの物語が、暖炉に火がともる石敷の伝統的なアイリッシュパブの中で語られてきましたが、現在、パブは音楽を聴く場としてより広く親しまれています。都市部から農村部まで、アイルランド島全土に数多く点在する伝統的なパブでは、専属ミュージシャンとゲスト・パフォーマーによる週替わりのプログラムが楽しめます。たとえばコークやウォーターフォードのような国際都市のパブでも、アントリム県の静かな農村部にある藁ぶき屋根のクロスキーズ・イン(Crosskeys Inn)のようなパブでも。ふらりと立ち寄り、椅子にゆったりと腰かけ、メロディーに耳を傾けてみましょう。そして、もし楽器の経験があるなら、セッションに加わってみてはいかがでしょうか。演奏者が多いほど、楽しさも増すことでしょう! ♡



1

2

3

4

5

6

お祭りの島

晴れの日も雨の日も、アイルランドではフェスティバルのシーズンが途切れることはありません。いつでも何かしらお祝い事があり、誰もがパーティ好きだからです。

春

3月17日のセント・パトリックス・デー(アイルランドのナショナルデー)、アイルランドは島全体がにわかに活気づきます。朝6時、ケリー県のディングルで始まるお祭りを皮切りに、ダブリンのカーニバル・スタイルのイベントから、アーマー県とダウン県の「ホーム・オブ・セントパトリック・フェスティバル(Home of St Patrick Festival)」まで、祝賀行事とパレードがあちこちで繰り広げられます。4月は、西部のフードシーンが「ゴールウェイ・フード・フェスティバル」で盛り上がりを見せます。世界的に「スター・ウォーズの日」として知られる5月4日には、映画のロケ地になったワイルド・アトランティック・ウェイの各地でイベントが開催されます。また、ベルファストの「マリタイム・フェスティバル」では、埠頭に大型帆船が停泊し、海に因んだエンターテインメントやグルメを楽しむことができます。

夏

夏の到来を祝う海の音楽祭「シー・セッションズ(Sea Sessions)」はアイルランド最大のサーフィンと音楽のフェスティバルで、数千人がドニゴール県のバンドーランを訪れます。アントリム県の海辺の街バリーキャッスルで行われる「ウルト・ラマス・フェア(Ould Lammas Fair)」では、伝統音楽とダンス、馬の売買、手作り品マーケットなど、催し物がいっぱい。また、ジェイムズ・ジョイスの名著「ユリシーズ」を記念した「ブルームズ・デー」のイベント(6月16日・ダブリン)、アントリム県グレンアーム城の「ダルリ

アダ・フェスティバル」、今話題の「カーロウ・アーツ・フェスティバル」など、文化に触れるイベントも盛りだくさんです。

秋

フェスティバル・シーズンが本当に熱気を帯びるのは秋です。たとえば、18日間にわたって演劇とエンターテインメントが繰り上げられる「ダブリン・シアター・フェスティバル」、舞台芸術やダンス、ビジュアルアートを楽しむことができる「ベルファスト国際フェスティバル」が盛り上がりを見せます。また、コークの「ギネス・コーク・ジャズ・フェスティバル」は国際的にも高く評価されています。けれど、秋に最も話題をさらうのは、ちょっと不気味で楽しいハロウィーンのイベントでしょう。アイルランドはハロウィーン発祥の地です! 「デリー・ハロウィーン(Derry Halloween)」は世界最大のハロウィーン・パーティと言われており、お化け屋敷、ゴーストウォーク、奇怪なコスチュームが注目を集めます。これに負けず劣らずの人気を集めるのが、ミーズ県とラウス県で行われる「プーカ・ハロウィーン・フェスティバル(Púca Halloween Festival)」。「幽霊」を意味するアイルランド語「プーカ」の名を冠するだけあって、このイベントの怖さは本物です!

冬

世界最高のオペラ・フェスティバルに選ばれたこともある「ウェックスフォード・フェスティバル・オペラ」が開催される12日間は、アイルランド南東部が壮麗なオペラの殿堂と化します。多くのバンドやシンガーソングライターがポートラッシュとポートスチュワートに集まる「アトランティック・セッションズ(Atlantic Sessions)」も毎年人気の音楽フェスで、コースウェイ・コースト沿いのレストラン、ホテル、バー、カフェを会場に、さまざまなコンサートが開かれます。ダブリンのお祭りムードは、ドックランズ地区の「クリスマス・フェスティバル」と「ニューイヤーズ・フェスティバル」で高まります。年が明けると、市内中心部のデンプルバー地区で開催される「トラッドフェスト」で、伝統音楽のコンサートやギグを楽しむことができます。♥

セント・パトリックス・フェスティバル
ダブリン

- 1 ゴールウェイのストリートミュージシャン
- 2 サワーズ・デリ(Sawers Deli) — ベルファスト
- 3 アイルランド文学博物館 — ダブリン
- 4 ゴールウェイの牡蠣
- 5 ビッグ・フィッシュ(The Big Fish) — ベルファスト
- 6 ハーペニー橋 — ダブリン

3つの都市

アイルランド島内の11都市すべてが、美味しい食べ物、気さくな人々、そして多彩な文化を誇り、旅行者は行き先の選択に困るでしょう。そこで、まず最初に訪れたい街として3つをご紹介します。

雰囲気のある街:ゴールウェイ

だからポヘミアンの雰囲気を漂わせ、活気にあふれた街、ゴールウェイには、アイルランド西部の最高の魅力が集まっています。かつてこの地を支配していた中世の14部族にちなんで「部族の街(City of Tribes)」と呼ばれているゴールウェイの人々は、その伝統的なルーツに従って、文化的多様性を大切に育ててきました。この街では、どの通りにも陽気な精神が(歌声となって!)響き渡っています。ゴールウェイはストリート・パフォーマーが集まることでも有名で、街の中心地ショップ・ストリートやウィリアム・ストリート、スパニッシュ・アーチに音楽が鳴り響いていることは珍しくありません。夕方から夜にかけて訪れると、多くのパブの入り口からアイルランド伝統音楽のメロディーが聞こえてくるでしょう。特に、ティ・コリ(Tig Cólil)、タフス・バー(Taaffes Bar)、クレーン・バー(Crane Bar)の3軒は、良質な音楽が聴けることで有名です。また、ゴールウェイはユネスコ「映画都市」、2020年の「欧州文化首都」に選ばれているほか、旅行ガイド「ロンリー・プラネット」の選ぶ2020年のお薦め旅行先ランキング「ベスト・イントラベル2020」の都市編でトップ10にランクインしており、シティブレイク(都市滞在型休暇)を過ごす街として完璧です。

食の街:ベルファスト

ベルファストはタイタニック号の建造で有名な街ですが、今では、そのフードシーンが輝いています。賞を獲得したレストラン、時代の最先端を行くシェフたち、そして素晴らしい地産品。どこに行くか迷っているなら、まずはセント・ジョージズ・マーケット(金~日)に向かいましょう。新鮮な食材が並び、

気さくな生産者たちが迎えてくれる、活気ある雰囲気です。ミシュラン星付きのレストランOXやEIPICでは、最高の趣向を凝らした料理を堪能することができます。モーン・シーフード・バー(Mourne Seafood Bar)と、フィッシュ&チップスで有名なジョン・ロングズ(John Long's)では海の幸を楽しみ、ビア・レベル(Bia Rebel)では大きなどんぶりでお出されるアイルランド風ラーメンに挑戦できます。ちょっと特別な体験をしてみたい方は、タイタニック・ベルファスト博物館へ。豪華客船タイタニック号のグランドステアケースを模した大階段のそばで、サンデー・アフタヌーンティーをお楽しみください。

文化の街:ダブリン

ダブリンは、どんな旅行者も笑顔で歓迎します。そしてどんな旅も、ストーリーにあふれたものになること間違いなしです。ヴァイキングが築いたこの街は、ジャンルを問わず実に多くの芸術家たちにインスピレーションを与え、また、芸術家たちを大事にしてきました。それは、国立美術館、国立博物館、ヒューレーン美術館やアイルランド現代美術館を訪れば(入場無料です)、容易に理解できるでしょう。ダブリンの政治史を肌で感じるには、ダブリン城、グラスネヴィン墓地、キルメイナム刑務所がおすすめ。ダブリン大学トリニティ・カレッジには、9世紀の彩飾写本『ケルズの書』が収蔵されています。「ダブリン・リテラリー・パブ・クロール(Dublin Literary Pub Crawl)」は、かつてアイルランドの偉大な文学者たちが溜まり場にしていたパブを巡るツアーで、自分も文学者になった気分を味わえます。このほかにも見どころいっぱいあるダブリンですが、一番の魅力は何でしょう? それは、次に行か待っているかわからない、予測がつかない面白さがあることです。クリスマスイブにグラフトン・ストリートを歩けば、そこで路上ライブをしているのはあのU2のボノかもしれません(もちろん、チケットは不要です)! ♥



雄大な自然



緑 滴る景色の中、水面が鏡のように輝く運河を下っていくカヤックの旅。カントリーハウスや森の木々を眺めながら湖を巡るサイクリング。マール草が房を成す砂丘と、打ち寄せる波を傍らに、風の吹き渡る海岸沿いを歩くトレッキング。アイルランドの旅では、アウトドアでアクティブに活動するのがおすすめです。

アイルランドには、ウォーキングやハイキングを楽しむのにぴったりのトレイル、パス、ルートが数多く存在し、ウォーキング初心者と経験者が一緒に参加できるイベントも開催されています。ドニゴール県のスリーヴ・リーグ、北アイルランドのコースウェイ・コースト、そしてクリア県のループ岬には、断崖の縁に沿って歩行者専用の道があり、世界の果てのような絶景と吹きつける潮風を楽しみながら歩くことができます。また、ティペラリー県のグレン・オブ・アハーロウのような起伏のある谷間を歩いて豊かな緑の美しさに浸ったり、ダウンス・モーン山地で花崗岩の広がる目を見張るような風景の中を歩いたりすることもできます。大西洋に突き出す岬を巡るウォーキング・ルートや、太古の森を歩く小旅行ルートは無数に存在し、いつでも旅人を温かく迎えます。作家のクリストファー・サマビルは、欧州の至るところを歩いて回りましたが、アイルランドには特別な思いを抱いており、その理由を次のように説明しています。「私がアイルランドを歩くのが好きなのは、人々が親切で、すべての段取りがとても容易で、しかも、あまり外部の人間が入っていない場所を歩いているという感じがするからです。それに、どんな野原や丘の中腹にも歴史の重みがあります」

歴史を歩いて訪ねる旅も良いですが、それだけではありません。アイルランドの水路は、シャノン川での激しい戦いから、運河を航行する交易用の馬力船まで、あらゆるものを目撃してきました。現在、そうした水路は、生い茂るシダや葎に縁どられ、鳥や野生動物が鳴き交わす、純粋な美に彩られた場所となっています。リートリム県のアレン湖運河を、パドルボードでゆっくりと下ってみるのはいかがでしょう。また、ナイトカヤックでコーク県ハイン湖の暗闇の中を進んでいけば、ホタルの放つ光が星々の爆発のように水面を照らし出す光景に出合えます。ファーマナ県のアップパー・アーン湖とロウワー・アーン湖では、入り江や狭い水路、島をボートで巡って探検家気分を味わうことができます。

もっと気軽にあちこち旅したい方には、自転車がおおすすめです。自転車でワイルド・アトランティック・ウェイ沿いを転々としながら旅するガイド付きのツアーはいかがでしょう。もちろん、ガイドなしで、アイルランド「いにしへの東部」の魅力的な町や村をレンタサイクルで自ら探索していくのも楽しいものです。また、リートリム県、キャバン県、ファーマナ県、ドニゴール県、モナハン県を周遊する全長298マイル(480キロ)のロングトレイルで限界に挑戦してみるのもよいでしょう。

気ままに旅する観光客から、勇猛果敢なロードレーサー、そしてマウンテンバイクの愛好家まで、あらゆるレベルに対応したサイクリング・ルートが整備されているアイルランド島。必要なのは、バッグを括り付けて、ヘルメットをかぶり、ペダルをこぎだすことだけです。♥



サイクリング の至福

歩くよりは速く、でも速すぎない。
だから、田舎の景色や雰囲気になつき浸ることができる
— アイルランドのグリーンウェイは、
車を使わずに過ごす休日に最適なトレイルです。

キルマックトーマスのアーチ橋
ウォーターフォード・グリーンウェイ

「グリーンウェイは真の意味で自然な旅のあり方
です。山のそよ風を顔に受け、潮の香りを感じ、
牧草の匂いを吸い込むことなのです」

でも、その静かに降り注ぐ霧雨こそが、グリーンウェイの緑をますます濃くしていくのです。旅の途中、天気が思い通りにいかないこともあるかもしれません。そんな時は、居心地の良いパブに立ち寄り、人々の会話や音楽に耳を傾けて過ごすのはいかがでしょうか。

各地のグリーンウェイは、アイルランド島内でも特に美しい田園地帯を通っています。たとえば、ポイン・グリーンウェイは、ポイン運河に沿った魅力あふれるルートです。全長は1.1マイル(1.9キロ)と短く、ラウス県ドロヘダのポイン川南岸にあるセント・ドミニクス・パークを出発点、ミーズ県オールドリッジにあるポイン川古戦場ビジターセンターを終点としています。

ベルファストのユニークな歴史のさまざまな側面を取り入れているのがコンバー・グリーンウェイです。このルートは、古いハーランド・アンド・ウルフ造船所(タイタニックを建造)の近くで一般道路を離れ、古い鉄道線路沿いに進みます。のどかな緑の回廊を通して市内を抜けると、開けた田園地帯に出て、遠くにはスクラボタワーが見えてきます。スクラボタワーとは、ナポレオン戦争で戦ったある地元民に敬意を表して建設された塔です。この地ではどこを訪ねても、歴史と無縁ということは決してありません。

アイルランドのグリーンウェイは、どこを走っても素晴らしい景観を眺め穏やかな時間を過ごすことができます。そして、自転車で移動する大きなメリットは、好きな時に好きな場所で足を止め、景色を満喫できることです。♥

「グリーンウェイ」とは何か、それを理解するヒントはその名前の中にあります。グリーンウェイはサイクリングとウォーキングのためのオフロード・トレイル網で、その多くはアイルランドの古い鉄道の廃線跡をたどっています。メイヨー県の絶景ルート、グレート・ウェスタン・グリーンウェイを出発点とするこの構想は、アイルランド島のあらゆる地域を組み入れ拡大し、静かな田舎のトレイルから、強風が吹き抜ける海岸ルートまでを網羅するに至りました。なぜそんなに拡大したのか、その理由は簡単です。グリーンウェイは真の意味で自然な旅のあり方だからです。山のそよ風を顔に受け、潮の香りを感じ、牧草の匂いを吸い込むことなのです。自転車をこぎながら周りを見渡すと、田園は本当に生き生きとした姿を見せ始めます。そして、いつでも好きなところで自転車を止め、その息吹を思う存分味わうことだってできるのです。

では、どこから出発すべきでしょうか?大冒険をしたいなら、東部海岸のウォーターフォード・グリーンウェイが最適です。このルートは、11の橋とヴィクトリア朝時代に造られた3つの壮大なアーチ橋を渡って、ダンガーヴァン湾に到達します。道中では至るところでアイルランドの歴史のさまざまな断片に触れることができるでしょう。城の廃墟、18世紀の製紙工場、歴史を感じるアーチ橋、気さくに旅行者を迎えてくれる村々——そのすべてが、この地域を豊かに織りなすタペストリーの一部なのです。

鉄道が敷設されるはるか以前、この地はヴァイキングの領土でした。そのため、かつてヴァイキングが暮らした集落の痕跡があちこちに見られます。そこを訪れてみると、彼らが眺めの良い場所を好んで暮らしていたことが分かります。アイルランドは雨が多い——それは確かです。



スベリン山地
ティロン県



乗馬
ダーク湖、クレア県



グレイゲナマナ
カーロウ県

遙か観光ルートを 離れて

アイルランド島の至るところで、ウォーキングや、サイクリング、乗馬、カヤックにもってこいの秘密の場所が見つかります。
必要なのは、注意深く目を凝らすことだけです。

ティロン県とロンドンデリー県の高原地帯、スベリン山地では点在するストーンサークルの周りを風が吹き抜けています。ワタスゲ、ヒース、野生のランなどが、泥炭の湿地や、静かな谷間、起伏する丘を渡るそよ風に踊っています。ここはウォーキングの国です。文明社会を離れ、自然に身をゆだねて山の頂上へ向かいましょう。スベリン山地はアイルランド島で最大の高原地帯の1つですが、黄褐色の荒野が何マイルも続くその風景には、未開の地の趣があります。この山地の西側の入口にあたる場所、陽気な雰囲気のある街オマーの近くにはゴーティン・グレン・フォレストパークがあり、美しい森林地帯を抜けるトレイルを歩く、多種多様なコースを提案しています。

リーシュ県のスリーヴ・ブルーム山地を源とするバロー川は、119マイル(192キロ)にわたって流れた後、ウォーターフォード湾に注ぎます。その流れで最も美しい場所の1つは、カーロウ県とキルケニー県の県境にあたるバロー航路(Barrow Navigation)の区間です。穏やかな森林地帯、草で覆われた曳舟道、そして起伏する緑の野原に縁どられたこの航路は、日常の喧騒を離れて冒険家気分を味わうのにぴったりです。風光明媚な水辺の集落、セント・マリンジのマリカーン・カフェ(Mullicháin Café)

のマーティン・オブライエン氏はこう語っています。「未発見という言葉は、バローを形容するには控えめな表現です。この辺りの水路を静かに移動していきながら、農耕地を抜け、ときには轟々と泡立つ水門を通過し、古い集落をいくつも通って行けば、昔の時代を垣間見ようような気持ちになるでしょう」。この魅力にあふれた地域を探索するため、アウトドア・アクティビティ・プロバイダーのゴー・ウィズ・ザ・フロウ・リバー・アドベンチャーズ(Go with the Flow River Adventures)などの会社がカヤックやカヌーを貸し出しています。また、ウォーキングやサイクリング愛好者向けのプランもたくさんあります。ウォーターサイド・ゲストハウス(Waterside Guesthouse)で自転車を借りて、もしくはハイキングシューズを履いて、グレイゲナマナの街からセント・マリンジまでの曳舟道(4マイル(7キロ))を行きましょう。出発してすぐ、野生動物のワンダーランドが目の前に現れ、川岸からカワウソやカワセミが勢いよく顔を覗かせます。

ダーク湖は、ティペラリー、ゴールウェイ、クレアの3県の県境に接する湖です。この湖の北岸には、ポータムナ・フォレストパークの野生動物保護区の中を縫うように、サイクリングとウォーキングの静かなトレイルが伸びています。周囲を注意深く観察して、公園に生息するダマジカを探してみましょう。狐やアナグマ、そしてオジロワシにも出遭うことができます。マウントシャノンを中心とする丘陵地で乗馬などのアクティビティを楽しむことができ、ダーク湖では湖岸の散策からスリル満点のクライミングまで多彩なハイキングが可能です。アイルランド神話の世界に足を踏み入れてみるなら、タウンティナ(Tountinna)とレンスター人の墓(Graves of the Leinsterman)に向かいましょう。タウンティナは「波の丘」を意味し、その伝説によれば、大洪水が来たときに生き延びたのはこの丘の上にいる人たちだけだったそうです……。その頂上に登って、ダーク湖の谷全体が眼下に広がる光景を見れば、その訳も納得できるでしょう。♥

映画の中に見る アイルランド

岩 だらけの島の隠れ家で瞑想するルーク・スカイウォーカー。ウェスタロスの海岸の上を飛翔するドラゴン。テクニカラーによる緑の野原を背景として恋に落ちるジョン・ウェインとモーリン・オハラ。こうした、見る者の記憶に残る場面を結び付ける1つの場所——それがアイルランド島です。

ロケ地を探す映画制作スタッフをこれほど多く惹きつけるのは、その風景にドラマがあるからでしょう。映画『ハリー Potter と謎のプリンス』の撮影で、風雨が激しく打ち付ける切り立った崖が必要になったとき、ワイルド・アトランティック・ウェイ最大の見所であるモハーの断崖(クリア県)よりも適したロケ地は存在しませんでした。風の吹きすさぶダウン県モーン山地の壮大さは、長く行方の知れなかった息子を探す女性の感動的な物語を描き数々の賞を受賞した作品『あなたを抱きしめる日まで』の背景となりました。スティーブン・スピルバーグ監督作品『プライベート・ライアン』の壮絶なオープニング・シーンを見た人は誰でも、それが撮影されたウェックスフォード県にあるカラクロー・ビーチの実際は静穏な姿に驚かもしません。

しかし、人を惹きつけるのは自然の美だけではありません。数々の作品を美しく飾り立てる歴史的建造物もまた、アイルランドが生んだ偉大な映画スターです。ミーズ県では13世紀築城のトリム城が、メル・ギブソン主演・監督の『ブレイブハート』で、イングランドの要塞都市ヨークの「代役」として違和感なく受け入れられました。優雅な屋敷、たとえば、コリン・ファレルとジェシカ・チャステイン主演の『Miss Julie (原題)』の舞台となったファーマナ県のキャッスル・クールや、トム・クルーズとニコール・キッドマンが共演した映画『遥かなる大地へ』やTVドラマ・シリーズ『THE TUDORS ~背徳の王冠~』が撮影されたウィックロウ県のキラダグリー・ハウスのような大邸宅は、いにしえの特権社会と栄華を極めた時代の典型例としてそのままに映画セットとなり得ます。もっとも、ドラマの迫真性という点では、ダブリンのキルメイナム刑務所や、ベルファストのクラムリン・ロード刑務所の監房に憑りつく犯罪と懲罰の実話の恐ろしさは、犯罪コメディの古典的傑作『ミニミニ大作戦』(1969年)や自主制作ドラマ『名もなき傭の中の王』のような映画に登場したその様子からは想像もできないものです。

都市部もまた、それぞれに相応しい形でスポットライトを浴びています。賑やかなTVコメディ『デリー・ガールズ ~アイルランド青春物語~』は、1990年代のデリー／ロンドンデリーの印象的な光景を描き出しており、今ではこの街を訪れる人たちの多くが、ドラマに登場する場所を探す「ロケ地巡礼」を楽しんでいるほどです。ベルファストは、TVドラマ『THE FALL 警視ステラ・ギブソン』の中で現実そのままの姿を見せており、ジェイミー・ドナーン演じる連続殺人犯が、ジリアン・アンダーソン扮する刑事巡査と心理戦を展開する舞台となっています。そして、ダブリンは非常に頻繁に映画・ドラマに登場してきたため、『ザ・コミットメンツ』や『ONCE ダブリンの街角で』のリアリズムから、ジェイムズ・ジョイスによる同名の短編を原作とするジョン・ヒューストン監督作品『ザ・デッド』/[ダブリン市民]よりのセピア調に描かれたものまで、観客はさまざまな街の姿を目にしてきました。

これほど多くの作品でTVと映画のファンを魅了してきたアイルランド島は、誰もが現実の世界で自ら冒険へ出るのにふさわしい場所なのです。♥

七王国を 探検する

『ゲーム・オブ・スローンズ』の冒険に出発しましょう。
北アイルランドの森、山、荒野、城砦がその舞台です。

北アイルランドでは、もう冬が完全に終わることはありません。『ゲーム・オブ・スローンズ』の手に汗握る物語は完結しましたが、HBOのこの大ヒットドラマが残したレガシーが、アイルランド島のこの地域に今も生き続けているからです。ドラマに登場する「七王国」のロケ地が世界のどこよりも多く存在するのが、ここ北アイルランドです。

「ウェスタロス」の世界は、意外な場所で見つかります。まず、北アイルランド各地のパブ、カフェ、ホテル計10ヶ所に設置されているのが『ゲーム・オブ・スローンズ』の物語の内容が美しく彫刻されたドアです。これは、ドラマ内の「キングズロード」ロケ地であるブナの並木道、ダーク・ヘッジズが嵐に遭った際に倒れてしまった2本の木を使って造られました。アントリム県グレンアームの宝飾品工房ザ・スティーンソンズ(The Steensons)では、ジョフリー王とその妃のマージェリーが被った王冠や、デナーリスのドラゴンブローチを制作した金細工職人に会うことができます。さらにベルファストでは、市内の有名な史跡を巡りながら、ドラマのシーンを描いたステンドグラス「グラス・オブ・スローンズ」に出会うことができます。また、アルスター博物館には、手縫いの刺繍を施した「ゲーム・

オブ・スローンズ・タペストリー」が展示されています。

「ウィンターフェル・ツアー」に参加すれば、『ゲーム・オブ・スローンズ』の世界にさらに深く浸ることができます。このツアーには、ドラマに登場する「ウィンターフェル」のロケ地となったキャッスル・ワードの中庭を訪れるなど、ファンならワクワクする体験がたくさん盛り込まれています。そんなファンの一員、エミリー・オドワイヤー(Emily O'Dwyer)氏はこのツアーの魅力を次のように説明します。「本当にウェスタロスに足を踏み入れたような気持ちになりました。私にとってハイライトの1つは剣闘体験で、本当にスターク家の一員になれたような気がしました」。ツアーで体験できることすべてに共通するのは、ドラマの世界観を忠実に再現していることです。毛皮のマントを身にまとい、アーチェリーで腕試しをしたり、斧投げにチャレンジしたり、さらにはダイアウルフに出会うことさえできます。

いくつかのロケ地をまとめて訪れるには、ツアーに参加するのが便利。撮影の裏話を聞きたいなら、マコムズ・コーチ・ツアーズ(McCombs Coach Tours)主催のツアーがおすすめです。なぜなら、ドラマの制作に関わり、出演した俳優たちを北アイルランドのロケ地まで送迎したドライバーがツアーに同行するからです。コースウェイ・コーストに沿って周遊すると、いくつかのロケ地を探訪できます。4億年前に形成されたクーシェンダンの洞窟もその1つであり、ここではメリサンドルが後に暗殺者となる黒い影を産み落とすシーンが撮影されました。また、バリントーイ港は、エイロン・グレイジョイが鉄諸島に帰還するシーンの撮影地です。♥

「毛皮のマントを身にまとい、アーチェリーで腕
試しをしたり、斧投げにチャレンジしたりするこ
とができます」

ドラゴンストーンの断崖
アントリム県



ウィンターフェル
ダウン県



ルークの島
ワイルド・アトランティック・ウェイ

スターパワー

この世界の外にある景色を見るために、「はるかかなたの銀河」
まで行く必要はありません。『スター・ウォーズ』と
ワイルド・アトランティック・ウェイが、映画という形で
完璧な共演関係を生み出しているからです。

もしワイルド・アトランティック・ウェイに沿ったどこかの場所で、映画のセットを見ているような気がしたら——それが事実だからかもしれません。映画のようなアイルランドの海岸線は、実際に『プリンセス・ブライド・ストーリー』や『ライアン・の娘』など、あらゆる作品に登場していますが、最も象徴的なシーンは、ジェダイが隠遁した島の隠れ家でしょう。『スター・ウォーズ/フォースの覚醒』と『スター・ウォーズ/最後のジェダイ』の2作で、主役級とも言える役割を果たしています。

『フォースの覚醒』の出演陣と制作スタッフが最初に立ち寄ったのは、ケリー県にある可愛らしい小村、ポートマギーでした。この近く(と言っても、大西洋のうねりの中に7マイル(11キロ)乗り出したところ)に、この映画を象徴する最も印象的なロケ地の1つ、スケリッグ・マイケル島があります。屋外撮影の総責任者であったマーティン・ジョイ氏は、次のように話しています。「私たちは、その素晴らしさにただただ圧倒されました。ここが『スター・ウォーズ』の世界にうまく溶け込むと確信しました」。6世紀に修道士が居住していたこの絶海の孤島は、ユネスコ世界遺産に登録されているため訪問できる人数が制限されていますが、ポートマギーからボートに乗り、島とその周辺地域を1周することができます。マーク・ハミルが「言葉にならない」と表現した場所です。

現在は、この静かな村で大勢の映画撮影スタッフが慌ただしく行き交っていた様子を想像するのは難しいかもしれませんが、当時のポートマギーは『フォースの覚醒』制作活動の中心地でした。近隣のB&Bは制作スタッフでいっぱいになり、冒険家のマイク・オシェイ(Mike O'Shea)など地元ガイドたちが荷物をスケリッグ・マイケルの頂上まで担ぎ上げ、貸ボート屋の従業員が設備と撮影スタッフを島まで送り届けたのです。この地を訪ねたら、撮影準備と打ち上げパーティの会場となったムーリングス・ホテル(Moorings Hotel)に泊まり、「フォース・パーフェクト・ピント・チャレンジ(The Force Perfect Pint Challenge)」に参加してマーク・ハミルと同じようにギネスを自分でピントグラスに注いでみましょう。

この海岸線沿いに、陰気な雲が去来する変わりやすい空模様、スリル満点の断崖、そして岩だらけの岬をたどりながら、北へ、南へと進むと、さらに多くの『スター・ウォーズ』ロケ地を巡ることができます。6世紀にスケリッグ・マイケルに造られた蜂の巣型の小屋が、『最後のジェダイ』撮影のため、バリーフェリターの近く、吹きさらしのシビル岬に見事に再現されました。そして出演者とスタッフは、ディングルの古風なグローサリー・パブ、フォクシー・ジョンズ(Foxy John's)で撮影の終了を祝いました。このほか、大西洋に突き出す荒涼とした大地の一角にあるコーク県ブロー岬でも、荒波が打ち寄せる断崖と洞窟で有名なクレア県のルー・ブ岬でも、撮影が行われました。

ミレニアム・ファルコン号とその随行者たちが街にやってきたときの地元の反応を知りたいなら、ドニゴール県のマリン岬にあるファレンズ・バー(Farren's Bar)のヒュー・ファレン氏が臨場感たっぷりに話してくれるでしょう。『スター・ウォーズ』がこの店から1マイル半のところで撮影されるなんて、とても信じられませんでした。もう、この世の出来事とは思えませんでした!♥



アデア マナー
リムリック県

宿泊施設

灯台で一夜を過ごしたことがありますか？ 中世の古城では？
 かつこよくキャンプをしたいときも、居心地の良いB&Bに
 滞在したいときも、アイルランドはその願いを叶えてくれます。

B&B(ベッド&ブレイクファスト)

アイルランドの温かいおもてなしは有名です。そして、それは根拠のない話ではありません。アイルランドのB&Bに足を踏み入れれば、気さくな笑顔で供される朝食があり、人と人とのふれあいを感じる雰囲気があり、周辺の飲食や観光に関するおすすめ情報も教えてもらえます。B&Bに滞在すれば、アイルランド文化を身をもって体験することができます。田園地帯に建つコテージから、都市部の洗練されたゲストハウスまで、B&Bは、肩の力を抜いて、温かく心地よい家庭的な雰囲気です。なおかつ手頃な価格で滞在できる宿泊施設です。

環境に配慮した宿泊施設

アイルランドでのグリーン・アコモデーション(環境配慮型の宿泊施設)の選択肢は増え続けており、静かな島に設けられたヨガスペース、環境への影響を抑えた自炊式コテージ、サステナビリティ志向のホテルやゲストハウスなど、多岐にわたっています。たとえば、クレア県バレン地方のグレガンズ キャッスル(Gregan's Castle)は、バレン・エコツーリズム・ネットワーク(Burren Ecotourism Network)の創設メンバーであり、特別なエコツーリズム・パッケージ用の宿泊施設です。ゴールウェイ県のデルフィ・リゾート(Delphi Resort)はグリーン・ホスピタリティ・アイルランド(Green Hospitality Ireland)のメンバーであり、また、アントリム県

バリーキャッスルのザ・ソルトハウス(The Salthouse)は、電力を風力発電と太陽光エネルギーで賄っているサステナビリティ志向の高級ホテルです。

古城ホテル

丸太の火がパチパチと音を立てる傍で、壮麗な中世のインテリア装飾を眺め、古風な雰囲気に浸りながら味わうピート香のウィスキー……古城滞在こそ、贅沢な旅の極致です。豪奢に、そして気ままに、しかも心地よくくつろいで過ごすことのできる古城ホテルは、広大な敷地に建っていて、森を散策し、クレーピジョン射撃に行き、鷹狩りに挑戦し、穏やかな川で伝統的な船旅を楽しむなど、多彩な過ごし方ができます。究極のエレガンスを追求した5つ星の古城ホテルも、ワイルド・アトランティック・ウェイや「いにしへの東部」からコースウェイ・コーストまで、アイルランド島の各地に点在しています。古城丸ごと一棟、家族や友人と一緒に貸し切りで利用することも可能で、専属スタッフがあらゆる要望に応じてくれます。また、より手頃な価格のプランも用意されており、大小のグループで借りられるセルフケータリング(自炊設備付き)のお城もあります。

灯台ホテル

遭難の物語、冒険譚、そして悲劇を飲み込んで渦巻く海に取り囲まれながら点滅する光……それがアイルランドの灯台です。切り立った崖の縁に建ち、大しけの海に監視の目を光らせる灯台は、他に類を見ないユニークな宿泊施設です。灯台守の家でゆったりと過ごすことも、灯台の塔に泊まることもできます。灯台ステイの魅力は何でしょうか？それは年間を通じて楽しめることです。冬には、暖炉の火をおこし、ゆっくりくつ



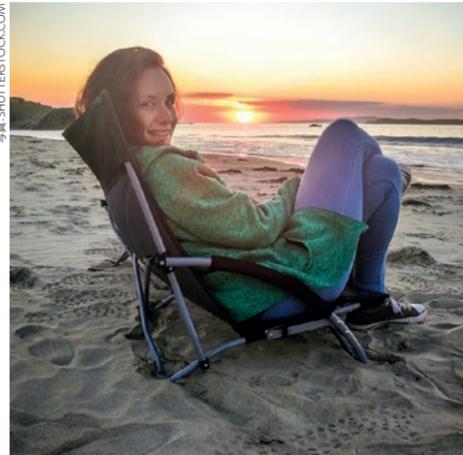
1



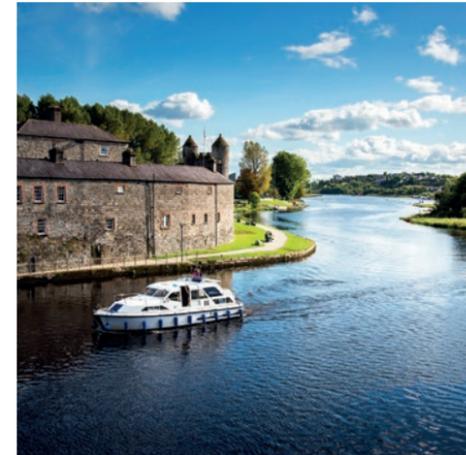
2



3



4



5



6

- 1 クレア島 — メイヨー県
- 2 フィン湖のバブルドーム — ファーマナ県
- 3 B&Bの朝食 — スライゴー県
- 4 レンバイル・ビーチ — ゴールウェイ県
- 5 アーン川のクルージング — ファーマナ県
- 6 バリーヴォラン・ハウス(Ballyvolane House) — コーク県

ろぎながら眼下の荒海を眺め、夏には、遅い日没と壮麗な大洋の眺望を楽しむことができます。

歴史あるカントリーハウス

19世紀の応接間、膨大な蔵書で埋まった図書室、大きなダイニングテーブルを囲む朝食にくつろぎを覚えるなら、アイルランドの歴史あるカントリーハウスに泊まってみましょう。閑静な敷地に建てられた美しい邸宅は、その多くが初代の所有者から一族代々受け継がれており、昔ながらの形式ばらないおもてなし、赤々と燃える暖炉の炎、古式ゆかしい家具調度、そしてろうそくの火の下で供されるディナーを楽しむことができます。

ファームハウス・ステイ

アイルランドのファームハウス・ステイでは、本物の田園生活の一端を体験できます。新鮮な農産物を使った朝食を味わい、素晴らしい環境の中ウォーキングを満喫して、日常の煩わしさから解放されてみましょう。多くの農場は特別なアクティビティを用意しており、ポニーに乗ったり、牛の乳しぼりに挑戦したり、アイルランド伝統のソーダブレッドの作り方を学んだりすることができます。

ユニークな宿泊施設

アイルランドには、ユニークな旅を楽しめる面白い宿泊施設もあります。ファーマナ県のフィン湖で、満点の星空の下で透明なバブルドームに滞在するのはいかがでしょう。首都ダブリンでは、19世紀初頭にナポレオンの侵攻に備えて建てられたマーテロー塔に貸し切りで泊まることもできます。また、宿泊用に改造した2階建てバスを借りてワイルド・アトランティック・ウェイを走り、ゴールウェイ県のコリブ湖や、アーマー県ティーピー・バレー・キャ

ンプサイトの伝統的なジプシーキャラバンに泊まるのも一興です。

キャンプ

大波が砕ける海辺にある息をのむようなキャンプ地、広々とした釣り鐘型テントに泊るエコファーム、太古からの森とさざめく小川に囲まれて自由自在に過ごせる豪華なグランピング——アイルランドでのキャンプには、ユニークなものから奇抜なものまで、あらゆる選択肢があります。なんと言っても、朝、森の中や海辺で目覚めることほど素敵な体験はありません。小石の浜に打ち寄せる波の音、ソーセージの焼ける匂い、そしてびっくりするような美しい日の出が待っています！

コテージ・ステイ

ワイルド・アトランティック・ウェイの壮大な冒険、北アイルランドの忘れがたいツアー、「いにしへの東部」の歴史を秘めた草原でのファーム・ステイ。旅の目的が何であっても、必ず見つかるのが、それぞれのニーズに合わせて選べる自炊設備の整った小さなコテージです。人里離れた岬の先端や、広大なビーチの片隅、そして繁華街の一角など、アイルランド島内各地にこうしたコテージがあり、すべてを整えて訪れる人を待っています。

クルーザー

手つかずの自然が残されたアイルランドの水路を楽しむのに良い方法は、最新式のクルーザーや昔ながらの屋形船で旅することです。クルージングに理想的な旅先としては、アイルランドの中心部を蛇行しながら流れる長大なシャノン川や、古城・グルメ・ゴルフで有名なアーン湖、そしてクレア、ティペラリー、ゴールウェイの3県にまたがる釣り人のパラダイスであるダーク湖が挙げられます。♥



DART (ダブリン県クライニー)



カナルポート (レイトリム県)



カーンロー港 (アントリム県)



ウォーターフォード・グリーンウェイ (ウォーターフォード県)



エリガル山 (ドニゴール県)



エルン湖の水上タクシー (ファーマナ県)

アイルランド・インフォメーション

ここでは、アイルランドへの旅を計画する際に知っておくべきことをご説明します。

基本情報

アイルランド島は南北に約302マイル/486キロメートル、東西に170マイル/274キロメートルの大きさで、総面積は約32,600平方マイル (84,421平方キロメートル) です。島全体には32の県があり、うち26県がアイルランド、北部の6県が北アイルランドです。アイルランドは議会制民主主義国家で国家元首は大統領です。北アイルランドは独自の行政府がありますが、英国の一部です。アイルランド島全体の人口は約600万人で、約430万人がアイルランド、約170万人が北アイルランドに暮らしています。アイルランドは若い人口構成が特徴で、国民の約3分の1が29歳以下です。

パスポート

【アイルランド】アイルランド入国に必要なパスポートの残存期間は、滞在期間+6ヵ月以上です。日本国籍所有者は査証(ビザ)不要。ただし、3ヵ月以上滞在する場合は、ダブリンではGarda National Immigration Bureau (GNIB) で、それ以外の都市では所轄の警察署で外国人登録が必要です。また、緊急時の連絡のため、入国後1ヵ月以内に在アイルランド日本国大使館宛に在留登録手続をしておくとい良いでしょう。

Garda National Immigration Bureau (GNIB)
住所 13-14 Burgh Quay, Dublin 2
<http://www.inis.gov.ie/en/INIS/Pages/registration>

【北アイルランド】駐日英国大使館にご確認ください。
TEL 03-5211-1100

【言語】アイルランド全島で日常的に英語が使用されています。アイルランドの一部[ゲールタウト(ゲールタハト)]と呼ばれる地域では、アイルランド語(ゲール語)が使われています。ケルト語派の言語であり、世界最古の言語の1つであるアイルランド語は、現在も全国の学校で教えられています。北アイルランドの一部地域ではスコットランド語の一種であるアルスター・スコット語が話されています。アイルランド人は、おしゃべり好きで有名です。実際に訪れると、そのような評判の理由がお分かりいただけるでしょう。

【日本との時差】マイナス9時間。サマータイム期間(3月最終日曜日から10月最終日曜日まで)はマイナス8時間。

【国際電話】アイルランド⇒北アイルランド 048-(相手先の電話番号。市外局番不要)

北アイルランド⇒アイルランド 00-353-(市外局番の最初の0をとった番号)-(相手先の電話番号)

日本⇒アイルランド (国際電話識別番号)-353 (アイルランド国番号)-(市外局番の最初の0をとった番号)-(相手先の電話番号)

日本⇒北アイルランド (国際電話識別番号)-44 (英国国番号)-(市外局番の最初の0をとった番号)-(相手先の電話番号)

アイルランドおよび北アイルランド⇒日本 00 (国際電話識別番号)-81 (日本国番号)-(市外局番の最初の0をとった番号)-(相手先の電話番号)

【電圧と電気器具】アイルランドでは220~230V、50Hz。北アイルランドでは240V。ソケットは両国ともに3本足(BFタイプ)が最も普及していますが、一部2本足(Cタイプ)のところもあります。

アイルランド島へのアクセス

空路 日本からの直行便は就航していませんが、ヨーロッパ主要都市をはじめ多くの定期便があるので乗り継ぎは容易。日本からヨーロッパ各都市への直行便を利用すれば、ほとんどの場合、同日乗り継ぎが可能で、その日のうちに到着できます。ロンドン発だけでも一日70便以上が就航し

ており、1時間ほどでアイルランドに到着します。

海路

英国とヨーロッパ大陸からフェリーでアクセス可能。主要な国際港は6ヵ所。

国内での移動

アイルランドは小さな島なので、空路、道路、鉄道のいずれでも容易に移動できます。

車

アイルランドの道路は全般に高い水準にありますが、田園地方に足を踏み入れると、道が狭く曲がりくねっている場合もあります。道路は全島で日本と同じ左側通行です。レンタカーの営業所は、空港、港、都市の中心部にあります。運転には日本の運転免許の他に、国際免許をご用意下さい。

飛行機

アイルランド島の大きさを考えると、国内線を利用する必要性は少ないですが、主要な空路としてはダブリン=ケリー線があり、約40分のフライトです。また、アラン諸島の3つの島すべてに定期便が就航しています。

公共交通機関

鉄道網は全島を網羅しており、アイルランドではアイリッシュ・レイルによって、北アイルランドではノーザン・アイルランド・レイルウェイによって運行されています。ダブリンの近郊電車であるダート(DART)はダブリンの海岸線と市街地を走っており、路面電車のルアス(Luas)には市の南部と中心部を結ぶ2つの路線があります。長距離バスや路線バスでの移動は、経済的でリラックスした旅ができます。アイルランドのバス・エーランと北アイルランドのトランス

リンクが、アイルランド全島でコーチ・ツアーを運営しています。また、民間のコーチ・ツアー運営事業者、空港送迎、都市間連絡、ゴルフ旅行などにも非常に多くの選択肢があります。

自転車

数多く業者があり、手頃な料金で自転車を借りることができます。また、借りた店舗と別の店舗で返却することができる業者も多く便利です。通常、レンタル料には鍵、空気入れ、パンク修理キット、跳ね上げ、運搬費が含まれますが、お手続きの際にご確認ください。また、万が一のトラブルに備え、ご加入の旅行保険の補償範囲を事前にご確認ください。子ども用自転車も借りることができますが、事前の予約をおすすめします。

船

アイルランドの離島のほとんどは、それぞれ地元の業者が運航するフェリーでアクセスが可能です。運行状況は当日の天候にもよりますので、Met Éireann(アイルランド)、Met Office(北アイルランド)の提供する気象情報をご確認ください。航路によっては、ハイシーズン(通常6月~8月)のみ運行するものもありますので、事前に時刻表の確認をお忘れなく。河川や湖、運河をポートや荷船で旅することもできます。船舶免許が不要で、未経験でもその場でトレーニングを受けることで乗ることができるポートもあります。

通貨とカード

【通貨】アイルランドの公式通貨はユーロ(€)です。北アイルランドでは英国通貨のポンド(£)が使用されています。

【銀行とクレジットカード】Visa、MasterCard、American Expressが広く普及しています。他のカードについては、使用前に確認しておいた方が良いでしょう。ATMは、銀行のほか、町や市の中心部にも設置されており、ほとんどのクレジットカードとデビットカードを利用することができます。

【両替】

空港の両替所や市内の銀行、郵便局、観光案内所、一部ホテル等に両替できます。また大手銀行発行の国際キャッシュカードを使用して24時間稼働のATMから現地通貨で引き出すことも可能です。

日本国大使館

【アイルランド】在アイルランド日本国大使館 住所 Nutley Building, Merrion Centre, Nutley Lane, Dublin 4
TEL: 01-202-8300
https://www.ie.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/

【北アイルランド】在英国日本国大使館(ロンドン) 住所 101-104 Piccadilly London W1J 7JT
TEL: 020-7465-6500
https://www.uk.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/

緊急時の連絡先

旅行中に緊急連絡先を必要としないことを願いますが、万一の際は以下までご連絡ください。

警察/消防/救急車

【アイルランド】TEL: 112または999

【北アイルランド】TEL: 999

ショッピング: 免税払い戻し アイルランド

EU外の居住者は、小売輸出制度に従い、アイルランド滞在中の購入品についてVATの一部の払い戻しを受けることができます。ほとんどの小売店はこのVAT払い戻し制度に加入しており、購入後、VAT払い戻しフォームを店に請求することができます。ダブリンにある3ヵ所の払い戻しポイントで税の払い戻しを請求できます。ダブリンとシャノン空港にも払い戻しポイントがあります。速やかに払い戻しを受けるためには、フォームに正しく記入し、クレジットカード番号を記載しましょう。購入した物品は、購入月から3ヵ月以内にEU外へ持ち出す必要があります。リファウンド・エージェントから払い戻しを受けるまで4~6週間かかります。VAT払い戻しフォームに記載した1つの品物の購入価格が€2,000以上の場合、出国地の税関職員にフォーム、レシート、および品物を提示して検印をもらう必要があります。免税ショッピングの詳細については、アイルランドの2つの大手リファウンド・エージェントTax Free WorldwideとFexcoでご確認ください。

北アイルランド

北アイルランドで購入した物品の税も払い戻しを受けることができます。<https://www.gov.uk/tax-on-shopping/taxfree-shopping>

天気

メキシコ暖流の影響で、アイルランドの気候は年間を通じて比較的穏やかで温暖です。天気は変わりやすいですが、極端な現象は稀です。

宗教

最も広く信じられている宗教はキリスト教ですが、住民は、幅広い信仰と信念を受け入れています。アイルランド島には、極めて多岐にわたる礼拝施設があり、特別な戒律に対応できる専門的な食料品店やレストランのほか、特定宗派向けの宿泊施設も幅広く存在しています。いずれも、極めて多様な宗派を快く受け入れるアイルランドの文化を反映するものです。

喫煙

アイルランドと北アイルランドには禁煙条例があります。屋内の就業場所で喫煙することは違法であり、これはすなわち、パブやレストランから、店舗、オフィス、そして公共交通機関に至るまで、あらゆる場所が禁煙であることを意味します。ただし、例外も存在しており、一部のホテルやゲストハウスは喫煙室を提供しています。また、パブ、ナイトクラブ、ホテルでは、通常、屋外の路上または庭園内に喫煙場所を設けています。吸い殻は必ず所定の灰皿に入れてください。これを守らない場合、不法なポイ捨てとして100ユーロの罰金が科せられることがあります。

チップ

アイルランドには、チップに関する厳格なルールはありません。一部のレストランでは、「サービス料」が適用されています。これは、チップの代金が勘定書に含まれているため、追加料金を支払う必要はない、ということです。サービス料が適用されていない場合は、お客様の判断となります。チップの平均的な額は規定料金の10~15%ですが、義務はありません。パブではチップを渡さないのが一般的ですが、カウンター席ではなく、テーブル席で給仕を受けた場合はこの限りではありません。

Ireland



Whilst every care has been taken to ensure accuracy in the compilation of this map, Tourism Ireland cannot accept responsibility for errors or omissions. Due to the small scale of this map, not all holiday centres can be shown. The information on this map is correct at time of going to press.
 ©2020 Tourism Ireland. Map creation by Michael Schmelting, www.maps.and.ocean.com | Map data © OpenStreetMap contributors, CC BY-SA